私案「卑弥呼の墓」
―津古生掛古墳と「径百餘歩」―

佃　収

はじめに

奈良県桜井市の「箸墓古墳」は「卑弥呼の墓」であると言われている。あるいは「壹與の墓」であると言う。しかし、前号（59号）で「纒向遺跡」は「邪馬壹国」ではないことを論証した。

それでは「卑弥呼の墓は何処にあるのか」ということになるであろう。そこで今回は、私の考える「卑弥呼の墓」を披露することにした。皆様からの御批判をいただきたい。

一　卑弥呼の墓

（一）「卑弥呼の墓」とは

卑弥呼は「247年」ころに死去する。『三国志』倭人伝は「卑弥呼の墓」について次のように書いている。

卑弥呼以死。大作冢。径百余歩。殉葬者奴婢百余人。

『三国志』倭人伝

「大作冢」とある。「大いに冢を作る」であり、「大きな冢を作る」ではない。「大きな冢を作る」のであれば「作大冢」という語順になる。

「卑弥呼の墓」が「箸墓古墳」であるならば「作大冢」と書かれたであろう。「箸墓古墳」は当時の日本列島では桁外れに大きな古墳だからである。

しかし「倭人伝」には「大きな墓を作る」とは書いていない。「卑弥呼の墓」は箸墓古墳のような「巨大な古墳」ではないのではないだろうか。

「大作冢（大いに冢を作る）」とは大勢の人々が協力して卑弥呼のために墓を造ったという意味であろう。

冢は「径百余歩」とある。「直径＝百余歩」の「円墳」である。

次に「殉葬者奴婢百余人」とある。「百余人」が殉葬されている。「百余人」を埋葬するには広い土地が必要である。「卑弥呼の墓」には「百余人」を埋葬するだけの広い墓域がある。

これが「卑弥呼の墓」である。

○「卑弥呼の墓」とは

- 「247年」頃に造られた墓である。
- 「径百余歩」の円墳である。
- 「百余人」が埋葬されるだけの広い墓域がある。

（二）「卑弥呼の墓」に関する新しい情報

「邪馬壹国」は「福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市付近」にある（59号）。「卑弥呼の墓」はこの領域の中で「径百余歩。殉葬者奴婢百余人」の墓を探せばよい。

しかしこれだけでは「卑弥呼の墓」を特定することはできない。さらなる「条件」が必要である。

幸い『契丹古伝』に次の記述がある。

洲鮮記曰、乃云、訪于辰之墟、娜彼逸豫臺米與民率為末合。空山鵑叫、風江星冷。駕言覽乎。其東藩封焉。彼丘不知、是誰行。無弔人。秦城寂存。嘻辰沄氏殷、今将安在。茫茫萬古、詞綫之感、有座俟眞人之興而已矣。

『契丹古伝』

（訳）『洲鮮記』に曰く、乃ち云う、辰之墟を訪ねるに、娜彼の逸豫・臺米は民と率いて末合となる。空山に鵑（ほととぎす）は叫び、風や江（川）や星は冷（つめた）い。駕言覽乎。其東藩封焉。彼の丘は是れ誰が行くかを知らず。弔人無し。秦の城は寂しく存す。嘻（ああ）辰沄氏殷、今将に安（いづくに）か在る。茫茫（ぼうぼう）たる萬古、詞綫之感。座して眞人の興るを俟（ま）つ有る已（のみ）矣。

「辰之墟」とある。「辰」については同じ『契丹古伝』に

次のように出てくる。

蓋辰者古国上代悠遠也。伝曰神祖之後、有辰沄謨率氏。本與東表阿斯牟須氏為一。辰沄謨率氏有子、伯之裔為日馬辰沄氏、叔之裔為干霊辰沄氏。干霊岐為干来、二千隔海而望干来。又分為高令云。然有今不可得攷焉。其最顕者為安冕辰沄氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。譲国於賁彌辰沄氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、撃退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又観兵亜府閭以掣漢。

『契丹古伝』

(訳) 蓋し辰は古い国であり、上代より悠遠なり。伝えて曰く、神祖の後、辰沄謨率氏有り。本(もと)東表の阿斯牟須氏と同一なり。辰沄謨率氏に子有り。伯の後裔を日馬辰沄氏といい、叔の後裔を干霊辰沄氏という。干霊は岐(わか)れて干来となり、二千里海を隔てて而して干来を見ることができる。又分れて高令となるという。然るに今はそれを考えることができない。その最も顕著なる者が安冕辰沄氏である。本(もと)東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰沄氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方(まさ)に薄(せま)り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩(かきね)をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府閭に兵を観せ、以て漢を掣(ひきと)

ど)む。

「辰者古国上代悠遠也」とある。「辰は古い国である」という。そして「安冕辰沄氏」(天孫降臨した天氏)と「賁彌辰沄氏」(卑弥呼の卑弥氏)が出てくる。天氏も卑弥氏も「辰(辰沄氏)」である。

卑弥呼は「賁彌辰沄氏(卑弥氏)」の子孫である。「賁彌=ヒミ=卑弥」である(56号、古代史の復元①『倭人のルーツと渤海沿岸』)。

「辰之墟」とはここでは「邪馬壹国」のことであろう。次に「逸豫・臺米」が出てくる。「逸豫(いつよ)」=「壹與(いつよ)」であろう。邪馬壹国の女王である。「壹與」は「266年」に朝貢している。このとき「張政」を中国へ送り返している(59号)。

「邪馬壹国(辰之墟)を訪ねるに、壹與(逸豫)と臺米は與民率為末合」とある。「逸豫(壹與)と臺米は民と率いて(邪馬壹国を出て行き)、もう二度と会うことはない」という意味であろう。

「邪馬壹国」は「女王壹與」が出て行き、滅亡している。その証拠に「266年」の朝貢以降は中国の史書(例えば『晋書』等)に「邪馬壹国」も「倭国」も出てこない。「266年」の朝貢を最後に「邪馬壹国(倭国)」は滅亡している(49号、古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』)。

邪馬壹国は狗奴国と戦っている。「四世紀」になると北

部九州は「熊襲」が支配している。景行天皇や仲哀天皇・神功皇后等による「熊襲征伐」が行われる。「熊襲＝狗奴国」である（古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』）。

壹與を追い出したのは「狗奴国」である。壹與は狗奴国との戦いに敗れて、民を連れて邪馬壹国を出て行った（49号、古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』）。

「張政」は狗奴国との戦いを支援するために派遣された。「20年間」も邪馬壹国に滞在して「狗奴国との戦い」を支援している。ところが「２６６年」に「魏」から「晋」へ王朝は交代する。「張政」は急きょ帰国することになる。『三国志』倭人伝には「送張政等還（張政等が還えるのを送る）」とある。「張政等」とあるから「張政」以外にも魏から派遣された人物が居る。おそらく狗奴国との戦いを指導する「戦術の参謀（武官）」であろう。これらの「戦争の指導者」が帰国したので邪馬壹国は狗奴国との戦いに敗れたのであろう。

壹與等が邪馬壹国を出て行ったので、「空山に鵠（ほとぎす）は叫び、風や江（川）や星は冷（つめた）い」とある。「邪馬壹国」は人影の無い寂しい空き地になっている。「邪馬壹国」は滅亡して人の住まない土地になっている。

さらに「彼丘不知是誰行。無弔人。」とある。「彼の丘」とは「卑弥呼の墓」のある丘であろう。「卑弥呼の墓」は「丘の上」にあることが『契丹古伝』からわかる。これが「卑弥呼の墓」に関する新しい情報である。

「彼の丘（卑弥呼の墓）は是、誰が行くかを知らず」とある。この丘へは誰も行かないとある。また「弔人も無し」とある。「卑弥呼の墓」には参拝する人も無いという意味であろう。「卑弥呼の墓」はすぐに「放置された土地」になっている。

それは当然であろう。北部九州は狗奴国の領土になっている。狗奴国（熊襲）の人々は敵国の女王の墓を参拝するはずがない。

「卑弥呼の墓」に関するこれらの新しい情報を得て、「卑弥呼の墓」を探すことが可能になった。

「卑弥呼の墓」についてまとめると次のようになる。

○「卑弥呼の墓」とは（まとめ）

■卑弥呼の墓は「福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市」の「丘の上」にある。

■「径百余歩」の「円墳」である。

■「殉葬者奴婢百余人」が埋葬できるような「広い墓域」がある。

■卑弥呼の死は「２４７年」ころである。卑弥呼の墓は古墳時代前期初頭頃の古墳である。

■「２６６年」の直後頃に邪馬壹国は亡び、「卑弥呼の墓」は誰も訪れない、放置された土地になっている。

これが「卑弥呼の墓」である。これらの条件に該当する

古墳（円墳）を探せばよい。

二　津古生掛古墳

（一）「津古生掛古墳」とは

私は「卑弥呼の墓」は「津古生掛（つこしょうかけ）古墳」であると考えている。「津古生掛古墳」とはどのような古墳であるかを見ていくことにしよう。

「津古生掛古墳」は「邪馬壹国」の領域である福岡県小郡市の「津古」にある。『小郡市史　第一巻』（平成八年）は「津古遺跡」について次のように説明している。

弥生時代終末になると、宝珠川南岸の台地にある津古遺跡で集落が急速に発達する。（中略）必ずしも生産性が高くない三国丘陵で、こうした集団が育った背景には、（中略）福岡平野から筑紫平野へ通じる要衝を占めたこの地の勢力が、その地理的な好条件を背景に政治的な発言を高めたのではないかという意見もある。古墳時代に入ってから、この地には津古生掛古墳―津古二号墳―津古一号墳―三国の鼻一号墳という九州でも特異な、古墳時代前期の首長墓が連続して造られるのも、こうした弥生時代終末以降の集落の急激な発達とは無関係ではない。　『小郡市史　第一巻』

「津古遺跡」のある「三国丘陵」では「弥生時代終末以降に集落の急激な発達があった」という。「弥生時代終末以降」とは「２００年～２４０年」ころをいうのであろう。「津古遺跡」は「必ずしも生産性が高くない三国丘陵で、こうした集団が育った」とある。それは朝鮮半島から多くの人々が逃げてきて住み着いたからではないだろうか。朝鮮半島南部にあった「倭国」は公孫氏の支配を嫌い、「２２０年～２３０年」頃に北部九州に逃げて来て、筑紫野市隈にあった「狗奴国」を南の「甘木市・朝倉町」へ追いやり、「福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市」に住み着いて「倭国」を再興する（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

当時、北部九州を支配していたのは「伊都国王朝」である。「倭国」は「伊都国王朝」と戦うことになる。『三国志』倭人伝に「相攻伐暦年」とあるのは「伊都国王朝」と「倭国」の戦いである。戦いは逃げてきた「倭国」が勝利する。卑弥呼は「共立」されて「女王」となり、「２３８年」に魏へ朝貢して「倭王」になる。日本列島に初めて「倭国」が誕生する（44号、45号、古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

「弥生時代終末以降に集落の急激な発達があった」とあるのは朝鮮半島から「倭国」の人々が逃げてきて「邪馬壹国」を建国したからであろう。邪馬壹国の人口は「七萬餘

戸」である。まさに「集落の急激な発達」である。

「古墳時代に入ってから、この地には津古生掛古墳―津古二号墳―津古一号墳―三国の鼻一号墳という九州でも特異な、古墳時代前期の首長墓が連続して造られる」とある。「津古生掛古墳」から「古墳（首長墓）」の築造がはじまっている。

「卑弥呼」は「日本列島の初代の倭王」である。邪馬壹国の「最初の大きな古墳」は「卑弥呼の墓」であろう。「津古生掛古墳」はこの地域で最初に造られた大きな古墳である。「津古生掛古墳」は「卑弥呼の墓」に相応しい。

さらにこの地は「福岡平野から筑紫平野へ通じる要衝」であるという。まさに「狗奴国」の通交を「邪馬壹国」が邪魔したという『桓檀古記』の記録と一致する（59号、古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

『津古生掛遺跡Ⅱ』（１９８８年、小郡市教育委員会）は「津古生掛古墳」の立地について次のように書いている。

古墳頂部からの眺めは素晴らしく眼下には朝倉平野の穀倉地帯が広がり一望できる。なお、北西側は福岡平野と朝倉平野の分水嶺である。この一帯は福岡平野と筑後、肥前を結ぶ重要な要所であったことが伺える。現在でも、国道３８６号線からは後円部をはっきりと確認できる。

『津古生掛遺跡Ⅱ』

「古墳頂部から、眼下に、朝倉平野の穀倉地帯が広がり一望できる」とあり、「現在でも、国道３８６号線からは後円部をはっきりと確認できる」とある。「津古生掛古墳」は丘の上にある。「王墓」であろう。

「津古生掛古墳」はこのように「卑弥呼の墓」の有力な候補である。

（二）「津古生掛古墳」の発掘

『小郡市史　第一巻』は「津古生掛古墳」の発掘の時のことを次のように書いている。

１９９０年、津古生掛古墳の発掘調査が始まった。古墳のあった丘陵は、発掘調査がされる前は、カシやシイの群生林で、シラサギの住みかになっていた。（中略）伐採された津古生掛古墳は、かなり離れた場所からでも丘の頂上にもっこりとした高まりのみえる古墳らしい古墳であった。

『小郡市史　第一巻』

図１　津古生掛古墳の全景（『小郡市史　第一巻』）

津古生掛古墳は発掘調査する前は「カシやシイの群生林で、シラサギの住みかになっていた」とある。津古生掛古墳は「放置」されていたことがわかる。

『契丹古伝』には「卑弥呼の墓」は「彼丘不知是誰行。

図1　調査前の津古生掛古墳

無弔人。」とある。「卑弥呼の墓」は誰も訪れない所になっている。それと一致する。壹與が出て行った後は「卑弥呼の墓」はカシやシイの群生林になっている。

「津古生掛古墳」は「かなり離れた場所からでも丘の頂上にもっこりとした高まりのみえる古墳」であったという。「丘の頂上」にある。『契丹古伝』には「卑弥呼の墓」を「彼丘」と書いている。それと一致する。

「丘の頂上」にあるから「王の墓」であろう。「卑弥呼」は「倭王」である。

「津古生掛古墳」を発掘調査して次のようなことが判明したという。

津古生掛古墳は、地山の削り出しと盛り土によって築かれた、直径二八メートル、周濠底からの見かけ上の高さ五メートルを測る円墳である。

『小郡市史　第一巻』

「津古生掛古墳」は「直径28ｍ」の「円墳」であるという。卑弥呼の墓は「径百余歩」の「円墳」である。（「径百余歩」の長さについては後に検討する）

次に「内部主体」について次のように説明している。

内部の埋葬主体は一つで、組合式木棺と推定されている。木棺の周囲にはその保護施設はなく、木棺が直に

埋め込まれた木棺直葬である。（中略）頭をほぼ真東に向けている。
木棺の中には朱が塗布されて、人骨は残っていなかったが、被葬者の右胸部から方格規矩鏡一面、左手首からガラス玉、左脇腹から鉄鏃、頭の上から鉄剣、そのほか棺の外から鉄鏃が発見された。

『小郡市史　第一巻』

「内部の埋葬主体は一つで、組合式木棺と推定されている。木棺の周囲にはその保護施設はなく、木棺が直に埋め込まれた木棺直葬である」という。
「津古生掛古墳」は「組合式木棺」で「直葬」である。「槨」は無い。「無槨」である。
『津古生掛遺跡Ⅱ』（１９８８年、小郡市教育委員会）は「津古生掛古墳」の「盛土」について次のように説明している。

盛土の方法は大きく4工程に分けられる。第1工程は旧地形の最高所、標高49・5ｍの高さに揃えるために、盛土の縁辺部（外郭）から、1ｍ程盛土を行い、水平に盛っている。それ以後、頂部までは3工程に分けて盛土を行っていることがわかる。『津古生掛遺跡Ⅱ』

「津古生掛古墳」は「盛土」をしている。「盛土」は「封土」である。
『三国志』倭人伝は「倭国の墓」について次のように書いている。

其死、有棺無槨。封土作冢。　『三国志』倭人伝

倭国（邪馬壹国）の墓は「有棺無槨」であり、「封土作冢」とある。「津古生掛古墳」は「無槨」であり、「盛土（封土）」をしている。まさに「倭人伝」の「無槨」「封土」に一致する。「津古生掛古墳」は「倭国」の墓であろう。丘の頂上にあるから「倭王の墓」である。
「ガラス玉」や「鉄鏃」については「個数」が書かれていない。「個数」は『倭人と鏡』（第35回　埋蔵文化財研究集会、１９９４年）に次のように出ている。

出土状況　棺床北側より鏡面を上に向けて出土。鏡背面には布痕が確認されている。
鏡式名等　方格規矩鳥文鏡　1面　13・9㎝
鏡鋳造期　漢鏡6期
伴出遺物　鉄剣1、ガラス玉57、鉄鏃31
『倭人と鏡』（第35回　埋蔵文化財研究集会、１９９４年）

ガラス玉は「57個」出土している。ガラス玉は小玉であ

り、「左手首」の位置にあったという。被葬者はおそらく「女性」であろう。男性は左手首に「57個のガラス小玉」を飾るようなことはしない。まさに被葬者は「倭王卑弥呼」であろう。

鉄鏃は「31個」出土している。鉄鏃については『津古生掛遺跡Ⅱ』(小郡市文化財調査報告書第44集、1988年)に「棺外」から「一括出土した鉄鏃は31本を数える」とある。「鉄鏃」は「定角式鉄鏃」である(後述)。

「左脇腹から鉄鏃、頭の上から鉄剣」が出土している。被葬者は男性のように思えるが、卑弥呼は狗奴国との戦いで「戦死」している(59号)。

「頭の上の鉄剣」は被葬者にとってもっとも重要な宝物であろう。『三国志』倭人伝によると「卑弥呼」には「刀・鏡」が下賜されている。

正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬。詣倭国拝仮倭王並齎詔賜金帛・錦罽・刀・鏡・采物。

『三国志』倭人伝

(訳)正始元年(240年)、太守弓遵は建中校尉梯儁等を遣わし、詔書と印綬を奉(たてまつ)る。倭国に詣り、倭王に拝仮(謁見)し、並に齎(持ってきた)詔書と金帛・錦罽(毛織物の敷物)・刀・鏡・采物(色の付いた品物)を賜う。

「正始元年(240年)」に卑弥呼に「金印・紫綬」が届けられる。このとき魏は卑弥呼に「金帛・錦罽(毛織物の敷物)・刀・鏡・采物(色の付いた品物)を賜う」とある。魏は卑弥呼に「金印」と共に「刀」と「鏡」を賜っている。

津古生掛古墳から出土したのは「鉄剣」となっている。しかし「日本の考古学」ではこの時代のものは「刀」とは言わずに「剣」ということが多い。

卑弥呼に下賜された「刀」は津古生掛古墳から出土した「鉄剣」ではないだろうか。そのため卑弥呼は「女王(女性)」ではあるけれども「金印」と一緒に下賜された「鉄剣(刀)」をもっとも重要な宝として扱っているのであろう。

小郡市埋蔵文化財調査センターの片岡宏二所長に「鉄剣」は「X線」等による調査をしたのかを伺った。調査はしていないと言うご返事であった。

『津古生掛遺跡Ⅱ』(1988年　小郡市教育委員会)には「残存長8・5cm、剣身幅3・1cm、厚さ0・6cmを計り、剣身部断面はレンズ状を呈する。身部の平面形は鋒に向かって次第に幅を狭めている。」とある。

図2　津古生掛古墳出土の鉄剣(『津古生掛遺跡　Ⅱ』)

「剣身部断面はレンズ状を呈する」とあるが、それは鋒の方を計測しているからであろう。もう一つの鉄片の「断

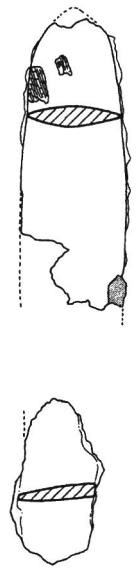

図2　主体部出土鉄器
実測図①（1/2）

面」は「片刃」のように見える。

「断面がレンズ状」とある計測点よりも「手前」の方を計測すれば「両刃」か「片刃」かは判明するであろう。

是非、「手前」の柄に近い方の計測や、X線等による調査をしていただきたい。

「鏡」は「方格規矩鳥文鏡　1面」とある。「鏡背面には布痕が確認された」という。『津古生掛遺跡Ⅱ』（小郡市文化財調査報告書第44集、1988年）には「鏡は布、絹に包まれて副葬されたものと考えられる」とある。鏡は大切に扱われている。しかも「被葬者の右胸部」にあったという。「鏡」は被葬者にとって重要な宝物であることがわかる。

卑弥呼には「238年」に「銅鏡百枚」が下賜されている。しかし「被葬者の右胸部」にあった「鏡」はその「銅鏡百枚」ではなく、「正始元年（240年）」に「金印」と共に下賜された「鏡」の方であろう。

「被葬者の右胸部」に「鏡」があり、「頭の上」に「鉄剣（刀）」が置かれている。「金印」と一緒に下賜された「刀」と「鏡」ではないだろうか。そのため「卑弥呼」はもっとも重要な宝として扱っているのであろう。

このように「津古生掛古墳」は「卑弥呼の墓」であろう。

（三）「定角式鉄鏃」

津古生掛古墳から「鉄鏃」が「31本」出土している。これは「定角式鉄鏃」と云われる型式の鉄鏃である。同じものが千葉県市原市の神門4号墳からも出土している。

大村直氏は『考古学研究』（考古学研究会、1983年119号）の中の「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」で、「定角式鉄鏃」について「その前後の段階における系統的な関係が認められない」と述べている。

「定角式鉄鏃」は日本列島には存在しなかった鉄鏃であり、「庄内式（併行）期」になって突如として出現し、その後はまた続かないと言う。一時期だけの「鉄鏃」である。その時期は「庄内式（併行）期」であるから、まさに「卑弥呼の時代」である。

「定角式鉄鏃」について私は次のように考えている。

「定角式鉄鏃」は朝鮮半島からもたらされたのであろう。

「204年」に公孫康は父公孫度の後を継ぐと、朝鮮半島

内を荒らし回る「韓と濊」を伐つ。「韓の南」にあった「倭国」も公孫康に伐たれる。『三国志』韓伝には「是後倭韓遂属帯方（この後、倭と韓は遂に帯方郡に属す）」とある。

このとき朝鮮半島南部から逃げて来た人々は「唐古・鍵遺跡」を破壊し、大和平野の弥生集落を壊滅させて、原野に「纒向遺跡」を形成する（47号）。その時点ではまだ「定角式鉄鏃」は入手していないのであろう。「纒向遺跡」からは「定角式鉄鏃」は出土していない。

その後、朝鮮半島南部の「倭国」は公孫氏の支配を嫌い、公孫氏と戦うことになる。それには最新の武器が必要である。「倭国」の人々は中国から「定角式鉄鏃」を入手したのではないだろうか。「定角式鉄鏃」は高度な技術で作られている。

図3　定角式鉄鏃（神門4号墳）

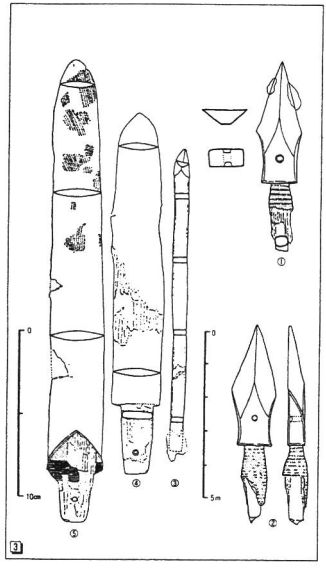

図3　神門4号墳の鉄鏃

しかし公孫氏との戦いに敗れる。「倭国」の人々は北部九州に逃げて来る。「220年～230年」ころのことである。北部九州を支配していたのは「伊都国王朝」である。「倭国」の人々は「伊都国王朝」と戦う（相攻伐暦年）。そして勝利して「邪馬壹国」を建国する（44号、古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

倭国の人々はこのとき「定角式鉄鏃」を持って朝鮮半島から逃げて来たのであろう。それを「伊都国王朝」との戦いに使った。最新の武器であるから威力を発揮したであろう。伊都国王朝との戦いに勝利する。

しかし倭国の人々は「定角式鉄鏃」を製造する知識や技術がなかった。「定角式鉄鏃」は「狗奴国」との戦いにも使われたであろう。「定角式鉄鏃」は残り少なくなった。その貴重な武器を「卑弥呼」が戦死したときすべて副葬したのではないだろうか。「鉄鏃」の副葬は「31個」という半端な数である。

「定角式鉄鏃」は「津古生掛古墳」以外の邪馬壹国の領域内（福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市）からは出土していない。「倭王卑弥呼」のために「定角式鉄鏃」をすべて副葬しているからであろう。

「定角式鉄鏃」は「津古生掛古墳」以外では唯一、千葉県市原市の「神門（ごうど）4号墳」から出土している。「41本」が出土しているという。

「神門4号墳」は「3世紀後半」の「纒向型前方後円墳」である。しかし千葉県市原市の「纒向型前方後円墳」は奈良県桜井市の「纒向遺跡」から伝播したのではないであろう。何故なら「纒向遺跡～千葉県市原市」の間には「纒向型前方後円墳」は存在しないからである。

図4　纒向型前方後円墳の分布（寺澤薫）

また「纒向遺跡」からは「定角式鉄鏃」は出土していない。「纒向遺跡」から市原市へ伝播したのであれば「纒向遺跡」からも「定角式鉄鏃」は出土するはずである。

市原市の「神門遺跡」の人々も「倭国（邪馬壹国）」と同様に「220年～230年」ころに朝鮮半島から直接市原市へ逃げてきたのであろう。「定角式鉄鏃」は「倭国」と同様に公孫氏と戦うために中国から入手したのではないだろうか。朝鮮半島から逃げてくるときそれを持って来て、先住民との戦いに使ったのであろう。その残りの「41本」をすべて「神門4号墳」に副葬したのではないだろうか。次に築造される「神門3号墳」からは鉄鏃は出土していない。「神門遺跡」の人々も「倭国（邪馬壹国）」と同様に「定角式鉄鏃」を製造する技術が無かったのであろう。

「定角式鉄鏃」は大陸（中国）で製造され、「渡来人（倭国や神門遺跡の人々）」によって朝鮮半島からもたらされたものであると考える。

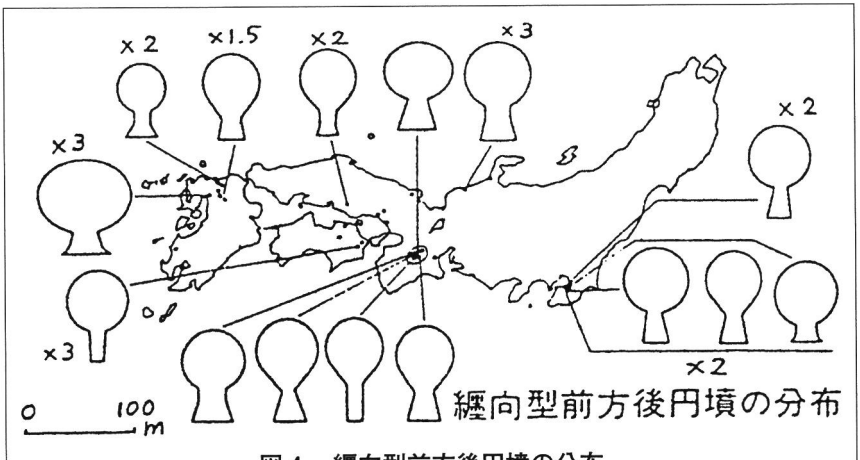

図4　纒向型前方後円墳の分布

〔考察〕

「纒向型前方後円墳」の源流は朝鮮半島にあると考えている。「纒向遺跡」は「２０４年」の直後頃に公孫康に伐たれて朝鮮半島から逃げてきた人々が樹立した国である（47号）。纒向遺跡では当初から「纒向型前方後円墳」を築いている。「纒向型前方後円墳」の源流が朝鮮半島にあることを示している。

朝鮮半島では「桓霊の間（１６０年ころ～１８０年ころ）」に「韓と濊」が近隣諸国を荒らし回る。「濊」に追い出された人々は朝鮮半島の東海岸に沿って南下し、日本海を渡り、山陰から北陸地方の海岸に流れ着き、「四隅突出型墳丘墓」を築く（39号、古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

「韓」に追い出された人々は対馬・壱岐から瀬戸内海に入り、吉備に上陸して岡山県倉敷市の「楯築遺跡」を築く（39号、古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。「楯築遺跡」は「双方中円墳」であるが、その片方の「方形」を除くと「纒向型前方後円墳」であるという（寺澤薫氏）。「楯築遺跡」は「纒向型前方後円墳」の日本列島における最古の墓である。「纒向型前方後円墳」の源流はやはり朝鮮半島にあることを示している。

市原市の「神門４号墳」も朝鮮半島で「纒向型前方後円墳」を墓制としていた人々が「２２０年～２３０年」ころに市原市へ逃げてきて築いたのであろう。近い将来、朝鮮半島から「纒向型前方後円墳」が発掘されるであろうと考えている。

（四）「津古生掛古墳」の殉葬墓

『小郡市史　第一巻』は「津古生掛古墳」の周囲を発掘して次のように説明している。

> 津古生掛古墳の周囲からは、方形周溝墓六基、円形周溝墓一基、木棺墓三基が発掘されている。これらの墓が、津古生掛古墳に接して規則的に造られる様は、盟主に仕える臣下、首長に従う家族や一族といった姿を彷彿とさせる。　『小郡市史　第一巻』

図５　津古生掛古墳とその周囲（『小郡市史　第一巻』）

津古生掛古墳の周囲には「10基」の墓が規則的に造られているという。これらの墓は一斉に造られたのではないだろうか。

卑弥呼の墓の周辺には「殉葬者奴婢百余人」が埋葬されている。倭国（邪馬壹国）では「殉葬」が行われている。津古生掛古墳の周囲に造られた「10基」の墓も殉葬者の墓ではないだろうか。「10基の墓が規則的に造られている」のは卑弥呼を埋葬するとき「殉葬者」として一緒に埋葬しているからではないだろうか。

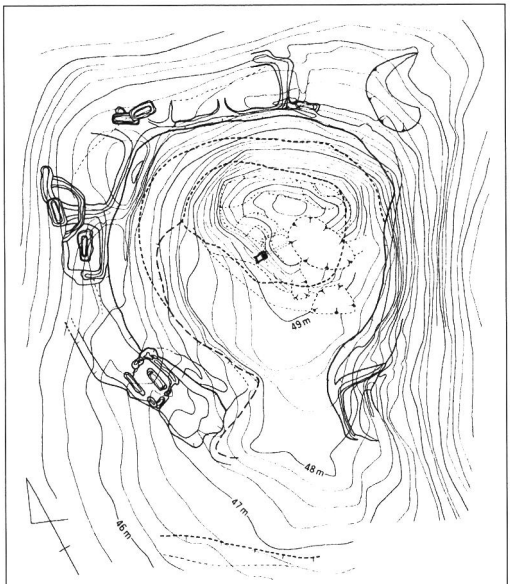

図5　津古生掛古墳全体図（1/500）

「一人の王」の墓（津古生掛古墳）の周囲に「方形周溝墓」「円形周溝墓」「木棺墓」というような「異なる墓制の墓」が造られている。「墓制」の違いは民族や種族の違いを示しているのではないだろうか。

『三国志』倭人伝には「共立一女子為王。名曰卑弥呼」とある。「卑弥呼」は朝鮮半島にあった「倭国の中の卑弥国」の出身であり、名を「呼」という。「卑弥国の呼」である（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』）。

「共立」されて「王」となる。「共立」したのは朝鮮半島時代の「倭国の中の国々」であろう。あるいは弁辰国の人も入っているのかもしれない。これらの人々が卑弥呼を「共立」したのであろう。津古生掛古墳の周囲に造られた「方形周溝墓」「円形周溝墓」「木棺墓」は卑弥呼を「共立」した国々の「墓制」を示しているのではないだろうか。卑弥呼が死去したとき「共立」した「10国」から「殉葬者」を一人ずつ差し出しているのではないだろうか。

「共立」とは「本来の王（伊都国王）」に対抗して「新しく別の王（卑弥呼）」を立てるような時に使う言葉である（古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』p113～）。したがって卑弥呼を「共立」した国々の中には「伊都国王朝」の「伊都国」や「対海国」「一大国」「末盧国」「奴国」「不彌国」の「6ヵ国」は入っていない。

「殉葬者奴婢百余人」は、おそらく戦争で捉えた「伊都国王朝」や「狗奴国」の人々であろう。「百余人」を埋葬するには相当な広さが必要である。津古生掛古墳は「丘の頂上」にあり、その周囲はなだらかな傾斜地になっている。「殉葬者奴婢百余人」を埋葬するには十分な広さである。（図1）

津古生掛古墳の周囲には「共立した国々」から差し出された「10人」が殉葬され、その外側に戦争で捉えた「奴婢百余人」が殉葬されたのであろう。これが「大作冢」ではないだろうか。

「津古生掛古墳」は宅地造成のために消滅した。私が「津古生掛古墳」を見に行ったときはすでに工事が始まっており、ブルドーザーが地面を削り、ダンプカーが土を運び出していた。丘の頂上にはまだ「津古生掛古墳」はそのまま残っていた。しかし工事中のために「津古生掛古墳」に近づくことはできなかった。

『津古生掛遺跡Ⅱ』（1988年　小郡市教育委員会）には「財政的な理由のために、原形保存は断念した」とあり、「昭和62年1月19日　生掛古墳主体部の切り取り作業」とある。そこで本論を書くにあたり、「小郡市埋蔵文化財調査センター」を訪れて片岡宏二所長に「切り取った主体部」を見せていただいた。保管倉庫に主体部の一部が置かれていた。「卑弥呼」はここに寝かされていたのだ。

財政的な理由から「卑弥呼の墓」が破壊されたのは残念である。「日本国民の損失」であろう。

（五）「津古生掛古墳」の年代

「津古生掛古墳」の年代はいつ頃であろうか。「卑弥呼の墓」とするには「年代」がもっとも重要である。

津古生掛古墳から出土した「鏡」から「津古生掛古墳」の年代が判明する。『小郡市史　第一巻』は次のように書いている。

津古生掛古墳で発見された鏡は、方格規矩鳥文鏡に分類されるものである。（中略）方格の内側には本来十二支が漢字で書かれるが、ここには「位至三公……」と読み取れる。しかしそれ以外はすでに図案化していて、この「位至三公」も漢字と認識して書かれたものかどうかも疑問が残る。鏡の文様の特徴から、この鏡は後漢晩期から三国（魏）時代に製作された可能性が高いと考えられる。鏡は宝器として、世代を越えて伝世するから、製作後にどのくらい経過して古墳に納められたのかはわからないが、鏡の表面には製作時の研磨痕が認められ、製作時点から墓に副葬されるまでの期間は比較的短かったことをうかがわせる。

その製作地については、鏡本体の銅質も良く、一般的に中国製と考えられているが、日本製ではないかという意見もあった。

そうした中で、一九九四年三月に、津古生掛古墳の鏡とよく似た鏡が京都府の丹後半島竹野郡弥栄町と中郡峰山町にまたがる大田南五号墳で出土し、それに中国の年号である「青龍三年」（235年）の文字があることからたいへんな話題になった。（中略）「青龍三年」という年号は（中略）魏の国で使用された年号である。

（中略）

方格規矩鏡としては、津古生掛古墳出土鏡も形式的に終わりに近いものであり、その特徴はよく似ている。鏡が製作されて、まもなく日本にもたらされたとすれ

ば、津古生掛古墳の方格規矩鏡も邪馬臺国問題と無縁ではない。

『小郡市史　第一巻』

「鏡の文様の特徴から、この鏡は後漢晩期から三国（魏）時代に製作された可能性が高いと考えられる」とある。しかも「方格規矩鏡としては、津古生掛古墳出土鏡も形式的に終わりに近いものであり、その特徴は（大田南五号墳で出土した「青龍三年」（２３５年）銘鏡と）よく似ている」という。

「津古生掛古墳」から出土した「方格規矩鳥文鏡」は「青龍三年（２３５年）」ころに製作された鏡であることがわかる。

「正始元年（２４０年）」に魏は卑弥呼に「金印・紫綬」を届ける。その時「刀と鏡」を下賜する。

正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬。詣倭国拝仮倭王並齎詔賜金帛・錦罽・刀・鏡・采物。

『三国志』倭人伝

（訳）正始元年（２４０年）、太守弓遵は建中校尉梯儁等を遣わし、詔書と印綬を奉（たてまつ）る。倭国に詣り、倭王に拝仮（謁見）し、並に齎（持ってきた）詔書と金帛・錦罽（毛織物の敷物）・刀・鏡・采物（色の付いた品物）を賜う。

この「鏡」が「津古生掛古墳」から出土した「方格規矩鳥文鏡」ではないだろうか。

「方格規矩鳥文鏡」には「本来十二支が漢字で書かれる」が、ここには「位至三公……」になっているという。「位至三公」とは「位が三公に至るように」という意味である。「三公」とは中国の最高の位をいう。魏は「倭王になったばかりの卑弥呼」に対して、位が「三公」になるように励めという意味で「十二支」の替わりに「位至三公」としたのではないだろうか。

「しかしそれ（「位至三公」）以外はすでに図案化していて、この「位至三公」も漢字と認識して書かれたものかどうかも疑問が残る」とある。

魏は「正始元年（２４０年）」に卑弥呼に「金印・紫綬」を届けている。これらは「景初二年（２３８年）12月」に明帝から帯方郡の太守が預かったものである。明帝はその直後の「景初三年（２３９年）正月」に崩御する。そのため「景初三年（２３９年）」は公式な外交は控えている。翌「正始元年（２４０年）」になって魏の新しい皇帝は「金印・紫綬」が帯方郡に預けたままになっているのを知り、早急に「金印・紫綬」を卑弥呼に届けるように指示したのではないだろうか。皇帝はその時、鏡に「位至三公」という銘を入れるように命じたのであろう。そのため鏡をあわてて造ることになり、「位至三公」以外の文字は省略したのであろう。それが図案化しているように見えるのではな

いだろうか。

津古生掛古墳から出土した「鏡」の「表面には製作時の研磨痕が認められ、製作時点から墓に副葬されるまでの期間は比較的短かったことをうかがわせる」とある。鏡は津古生掛古墳に副葬される少し前に造られている。

卑弥呼が埋葬されるのは「247年」ころである。鏡が造られるのは「240年」であろう。「製作時点から墓に副葬されるまでの期間は比較的短かった」とあるのにピッタリである。

『小郡市史　第一巻』にも、「鏡が製作されて、まもなく日本にもたらされたとすれば、津古生掛古墳の方格規矩鏡も邪馬臺国問題と無縁ではない」と書いている。

「津古生掛古墳」は「247年」ころに造られているのであろう。

○津古生掛古墳の年代

■津古生掛古墳の年代は「247年」ころであろう。

■卑弥呼の死去年とほぼ一致する。

(六)　「卑弥呼の墓」＝津古生掛古墳（まとめ）

津古生掛古墳は「卑弥呼の墓」であろう。「卑弥呼の墓」と「津古生掛古墳」を比べると次のようになる。

○「卑弥呼の墓」と「津古生掛古墳」

■「邪馬壹国」の領域は「福岡市南区～大野城市・筑紫野市・小郡市付近」である。「卑弥呼の墓」はこの領域内にあるはずである。

■「津古生掛古墳」は「小郡市」にある。「邪馬壹国の領域内」である。

■卑弥呼の墓は「径百余歩」であり、「円墳」である。津古生掛古墳も「円墳」である。

■「卑弥呼の墓」は「丘」にある。津古生掛古墳は「丘の頂上」にある。

■丘の頂上にあるから「津古生掛古墳」は「王」の墓であろう。卑弥呼は「倭王」である。

■津古生掛古墳から出土した「ガラス小玉（57個）」は左手首の位置にあった。「女性」であろう。「女王」である。卑弥呼は「女王」である。

■津古生掛古墳から「鉄剣と鏡」が出土している。「鉄剣」は頭上に副えてあり、「鏡」は「被葬者の右胸部」にあり、絹布で包まれていた。被葬者にとって重要な品々であることを示している。「240年」に魏は卑弥呼に「金印」と共に「刀と鏡」を賜っている。「鉄剣（刀）と鏡」は魏の皇帝からの下賜品ではないだろうか。『三国志』倭人伝の記述に一致する。

■「津古生掛古墳」から出土した鏡は大田南五号墳から出土した「青龍三年」（235年）銘鏡とよく似ているという。津古生掛古墳の鏡は「240年」に造られ

たのであろう。

■「鏡」は「製作時点から墓に副葬されるまでの期間は比較的短かった」とある。「240年」に造られて、「247年」に卑弥呼の墓に副葬されたのであろう。

■卑弥呼の墓には「殉葬者奴婢百余人」とある。倭国には殉葬の風習があった。倭国（邪馬壹国）は「伊都国王朝」や「狗奴国」と戦っている。「殉葬者奴婢百余人」はこれらの国の捕虜であろう。

■「殉葬者奴婢百余人」を埋葬するには広い「墓域」が必要である。津古生掛古墳は丘の頂上にあり、その周りはなだらかな傾斜地になっている。「殉葬者奴婢百余人」を埋葬するには十分な広さである。

■津古生掛古墳の周囲には様々な墓制の「10基」の墓が規則的に造られている。これらは一斉に造られた「殉葬者」の墓ではないだろうか。卑弥呼が死去したとき、卑弥呼を共立した「10国」が殉葬者を一人ずつ差し出しているのではないだろうか。

□「津古生掛古墳」はこのように「247年」ころに造られた「卑弥呼の墓」であろう。

「津古生掛古墳」は「卑弥呼の墓」であると言えるであろう。

ただし、問題がある。卑弥呼の墓は「径百余歩」である。「津古生掛古墳」は「直径28m」の「円墳」である。「百余歩」が従来言われているように「150m」位であるならば「津古生掛古墳」は「卑弥呼の墓」ではない。

次に「百余歩」について検討しよう。

三　「短里」と「長里」

（一）「短里」説

「短里」説を提唱したのは古田武彦氏である。『「邪馬臺国」はなかった』（朝日新聞社、昭和46年）の中で「40年」も前に提唱している。

従来は、中国の史書は「一里＝約435m」で書かれていると考えられてきた。これに対して古田氏は、『三国志』韓伝に「韓（朝鮮半島）」は「方可四千里」とあることに注目して、地図から朝鮮半島の一辺は「300～360㎞」であるとし、「一里＝75～90m」という結果を得ている。「一里の長さ」が従来の「一里＝約435m」とはまったく異なっている。これが古田氏の「短里」説である。

○長里と短里

■長里　一里＝約435m

■短里　一里＝75～90m

「短里」説は当時大論争になった。しかし今でも「短里」

説を認める人は少ない。

(二)「短里」説の立証

「短里」説は谷本茂氏によって立証されたと言える。

谷本氏は『数理科学』(1978年3月)に「中国最古の天文算術書『周髀算径』之事」と題して「短里」について書いているという。同旨の論文が古田武彦著『邪馬一国の証明』(角川文庫)の巻末に載せられている。その題は「魏志倭人伝と短里　『周髀算径』の里単位」である。

この論文の結論として谷本氏は次のように述べている。

> 一里は約76～77mと知ることが出来る。(中略)従来知られていた約四百～五百メートルの里とは明らかに異なる里単位である点を確認することが重要である。
>
> 谷本茂氏

周時代(紀元前1050～紀元前771年)は「短里」であったという。「短里」が存在したことは谷本茂氏によって立証された。「30年」以上も前のことである。

○「短里」の長さ

■「短里」の一里＝約76～77m

四　中国の「度量衡」

(一)　国毎の「度量衡」

中国の「度量衡」について見ていこう。

周時代の「度量衡」は国毎に異なる。中国が統一されていないからである。『春秋左氏伝』に春秋・戦国時代の「度量衡」に関する記述がある。

> (定公)四年(紀元前506年)、(魯も衛も)もとの殷(商)の政治のしかたで治め、土地の区画は周の尺度(縄)を用いました。
>
> (晋の)唐叔には夏の故居(太原)に封じ、政治は夏の風習を生かし、土地の区画は戎の尺度(縄)を用いました。
>
> 『春秋左氏伝』

「周の尺度(縄)」「戎の尺度(縄)」が出てくる。国毎に「尺度」は異なっている。

古田武彦氏もそれは認識している。『古代は輝いていたI』(朝日新聞社)の中で次のように述べている。

> 周時代においては、諸国それぞれの文物・制度をもっていたから、中国全体が同一単位で統一されていたとは、必ずしも断定できないこと。また、初・中・後期等、同じ周時代でも、時期によって別異がありえよう。

（中略）
以上の問題を視野におくとき、「周朝全体が『短里』によっていた」とは安易に言うべきではないけれども、反面、「周朝において、『短里』の使用された時期と場所があった」。この一事を疑うことは難しいのである。

古田武彦

（二）始皇帝による「度量衡」の統一

「度量衡」を統一したのは始皇帝である。始皇帝は中国全土を統一すると「度量衡」も統一した。

数は六を以て標準とし、符節（わりふ）や法冠（かんむり）の長さは六寸、輿（くるま）は六尺、六尺を一歩とし、乗用車は六馬だての馬車を用いた。（中略）法度（ます）、衡（はかり）、丈尺（ものさし）を統一した。車の両輪のはばを一定にし、文字も書体を一つにした。『史記』秦始皇本紀（平凡社『史記』による）

これが始皇帝による「度量衡」の統一である。

（三）「長里」の誕生

始皇帝は「丈尺（ものさし）を統一した」とある。「物差し」の長さを統一している。しかしそればかりではない。始皇帝によって「六尺為歩（六尺を一歩となす）」と制定されたのである。これは単なる「度量衡」の統一ではない。

「尺」は「物の長さ」を計る単位である。「歩」は「距離の長さ」の単位である。始皇帝は「尺」と「歩」を「長さの単位」として「統合」したのである。それが「六尺為歩（六尺を一歩と為す）」である。

○「長さ」を計る単位
■物の長さ　丈・尺・寸
■距離の長さ　里・歩

始皇帝により「一歩＝六尺」となった。これにより「一里」の長さが変化した。

「一里＝３００歩」であるという。『説文解字』は「里」について次のように説明している。

里　伝曰、古者三百歩為里。　『説文解字』

『説文解字』は後漢時代に成立している。後漢時代に「伝えて曰く」とあり、しかも「古（いにしえ）は三百歩を一里と為す」とある。「昔は３００歩を1里としていたという伝承がある」と説明している。

後漢時代の前の前、すなわち「秦」よりももっと以前のことであろう。周時代である。あるいは周より以前から「一里＝３００歩」であったのかもしれない。

始皇帝により、「一歩＝六尺」になった。「一里＝３００歩」であるから「一里＝３００歩×６尺＝１８００尺」になる。当時の「一尺」は「23～24㎝」位であるから「一里＝１８００尺×（23㎝～24㎝）＝４１４～４３２ｍ」となる。こうして「長里」が誕生した。

始皇帝以前は「短里」であった。始皇帝が「度量衡」を統一して「長里」が誕生したのである。

（四）魏・西晋の「短里」

始皇帝によって「長里」が誕生した。「長里」は次の漢王朝に引き継がれる。しかしその次の魏・西晋では「短里」が復活したという。古田武彦氏は『古代は輝いていたⅠ』（朝日新聞社）の中で次のように述べている。

> 秦の新法（度量衡の統一）は漢朝に継承される。したがって漢の長里は同じく〝約４３５ｍ〟だったのである。これに対して、これを廃止し、周の古法に復したのが、魏・西晋朝であった。（中略）蜀朝は、漢の劉氏の正統を継ぐと称する劉備の王朝だったから、「里単位」においても、秦・漢の里単位を継承した。
>
> 古田武彦

「魏・西晋」朝は「短里」であるという。

『三国志』「韓伝」は、「韓（朝鮮半島）は方可四千里」と書いている。これは「短里」である。『三国志』「韓伝」は「短里」で書かれている。

『三国志』「倭人伝」を見ると「韓国を歴るに、七千餘里」とある。「韓国の一辺＝四千里」（短里）を用いて記述している。『三国志』「倭人伝」も「短里」で書かれていることがわかる。

○『三国志』の「韓伝」と「倭人伝」は「短里」で書かれている。

（五）「東晋」による「長里」の復活

古田武彦氏は「短里」は「大興三年（３２０年）」に廃棄されたという。『古代は輝いていたⅠ』（朝日新聞社）の中で次の記事を挙げている。

> （大興）三年（３２０年）七月、詔して曰く、「（中略）昔、漢の高祖、沛を以て湯沐の邑と為し、光武も亦南頓を復す。優復の科、一に漢氏の故事に依る」と。
>
> 『晋書』元帝紀

古田氏はこれについて次のように説明している。

> 西晋は建興四年（３１６年）に匈奴の劉曜等の攻撃によって滅亡した。（中略）このあと、健康（今の南京）

に建国したのが、東晋第一代の天子、元帝であった。彼は亡国の西晋朝の遺風を一掃し、もっぱら漢制に復帰することを宣言した。それが右の一文だ。「劉氏」を名乗って、漢室（の血脈）を継ぐと称した新興匈奴に対し、真に漢制を保存する中国の正統の国家たることを主張しようとしたのであろう。（中略）かくして「里制」も、ふたたび漢の長里に復帰し、以後、南朝の各王朝、さらに隋・唐へと大異（五～六倍もの変化）はなかったのである。　古田武彦氏

「東晋」から「長里」になり、現在に至るという。そして古田氏は次のように述べている。

『三国志』の倭人伝は魏（西晋）朝公認の里単位で堂々と記されていたのだ。　古田武彦氏

『三国志』「倭人伝」は「短里」で書かれていると古田武彦氏は力説している。

五　「径百余歩」

（一）「短里」の「一歩」

「短里」では「一里＝約76～77ｍ」である（谷本茂氏）。「一里＝３００歩」であるから「一歩」の長さは次のようになる。

○「短里」の一歩
■一里＝76～77ｍ
■一里＝３００歩
■一歩＝（76～77ｍ）／３００歩＝約25㎝

「短里」では「一歩＝約25㎝」である。

○「短里」の「一歩」
■短里の一歩＝約25㎝

（二）「径百余歩」とは

卑弥呼の墓は「径百余歩」である。『三国志』「倭人伝」は「短里」で書かれている。「一歩＝約25㎝」である。「百歩」は「25㎝×１００歩＝25ｍ」になる。「径百余歩」とは「直径25ｍ余りの円墳」ということになる。

○「卑弥呼の墓」の「径百余歩」とは
■直径25ｍ余りの円墳

「津古生掛古墳」は「直径28ｍ」の円墳である。まさに

「径百余歩（直径25ｍ余りの円墳）」と言えるであろう。

■直径28ｍ≒「径百余歩（直径25ｍ余り）」

『三国志』倭人伝は「卑弥呼の墓」を「径百余歩（直径25ｍ余りの円墳）」と書いている。「津古生掛古墳」は「直径28ｍの円墳」である。まさにピッタリである。

これほど正確なのは「張政」が実測しているからであろう。ゴルファーはグリーンまでの距離を歩測する。張政も「卑弥呼の墓（津古生掛古墳）」を歩測しているのであろう。「張政」は魏の使者である。魏は「短里」である。張政は「短里」で歩測して「径百余歩」を得たのであろう。

以上の理由から、「卑弥呼の墓」は「津古生掛古墳」であると考える。

○卑弥呼の墓

■「卑弥呼の墓」は「津古生掛古墳」である。

おわりに

従来は「径百余歩」を「直径１５０ｍの円墳」と考えた。「箸墓古墳」の後円部の長さにほぼ等しい。それを根拠に「箸墓古墳」は「卑弥呼の墓」であると言われてきた。

しかし『三国志』「倭人伝」は「短里」で書かれている。「径百余歩」は「短里」である。古田武彦氏は「40年」も前から「短里」説を提唱している。ところが歴史学界や考古学界は「短里」説を無視してきた。そのため多くの論文が「誤り」を犯してきたことになる。

「卑弥呼の墓＝津古生掛古墳」説にも不安な点がある。それは「津古生掛古墳」から「金印」が出土していないことである。

「金印」は卑弥呼が死去したとき魏朝へ返すということで張政に託したのであろうか。ところが張政が帰国するときはすでに「晋王朝」に交代している。「魏王朝」の「金印」は大切には保管されないであろう。そのため誰かが盗み、鋳潰したのではないだろうか。

それとも「金印」は次の「男王」に引き継がれ、さらに「壹與」に引き継がれたのであろうか。「壹與」は狗奴国（熊襲）との戦いに敗れて邪馬壹国を捨てて逃げていく。「金印」を持って逃げたのであろうか。

「卑弥呼の墓」の「条件」に適合する古墳は、私の知る限り「津古生掛古墳」以外には存在しない。「津古生掛古墳」から出土した「鉄剣」がX線等による調査で「刀」であることが判明すれば「卑弥呼の墓＝津古生掛古墳」説は立証されたと言えるのではないだろうか。是非、津古生掛古墳から出土した「鉄剣」の再調査をお願いしたい。

前号（59号）で私は、「遺跡を特定するのは難しい」と

述べた。それにもかかわらず今回は「卑弥呼の墓」を特定している。皆様からのご批判をお待ちしている。

参考文献

佃　収　(星雲社)
・古代史の復元②『伊都国と渡来邪馬壹国』
・古代史の復元④『四世紀の北部九州と近畿』